



ピッポ新聞

2008

11

No.237

子どもの本専門店

ピッポ

年間購読料(送料込み)1500円

編集・発行 伊藤俊男

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

デパートの古書市

『雑記帳』拡大版

つい先日(10月29日、11月4日)静岡のデパートで開催された、「しずおか古書市」に出店をしました。5年ほど前、インターネット上で見よう見まねではじめた「古本屋」ですが、これで、リアルな「古本屋」としてもデビューしたわけです。そこで初めての体験のあれやこれやをご報告します。

準備編

参加を決めた時から、準備をはじめました。商売では新しい試みをする場合は、多少なりともお金(投資?)が必要です。これまではネット上に本の価額を表示するだけでよかつたのですが、「古書市」では、本に直接価額を表示する必要があります。そこで必要なのがラベルとチェッカーです。ラベルは他の店の本と区別するため店名を印刷したものでなければなりません。文具屋に注文して1か月ぐらいできてきました。一箱に十本(一本に十巻合計二百巻入っていた)あり、こりゃ一生分あるのでは、と思いましたが、チェッカーはネットで調べて、一番安いのを注文したところ中国製でした。でも充分役に立ってくれています。こんなちっぽけなものでも投資と呼べば、お笑いくさかもしれませ

んが、いままでなかったものを新しい商売のために買ったのですから、投資と読んでもかまいませんよね。

投資といえば、倉庫代わりに今借りている部屋(ワンルームマンション)が手狭になったので、ここ数ヶ月倉庫を探しました。あちこちの知り合いにも声をかけたのですが、いずれも「帯に短し、たすきに長し」というものしか見つからないのです。一度は十七坪の倉庫を契約する寸前までいったのですが、不動産屋から「家主が敷金以外1か月分の礼金も欲しいといっている」と言ってきたから「何年も借り手になった倉庫に礼金とはおかしいではないか。もしどうしてもというならキャンセルする」と伝え、結局話が流れたのです。実は古本屋仲間はその倉庫のことを話したら、「そこは知っているが、あんな出し入れがしにくい倉庫、ぼくだったらただでも借りないよ」といわれ、内心「しまった!」とおもっていたので、話が流れて胸をなでおろしたしいです。

しかし、「古書市」用に値段を付けた本はほとんど溜まっていきます。マンションには段ボール箱が積み上がり、挙げ句の果て、ピッポの店内にも段ボールが積み上がり、新刊の子どもの本屋なのに倉庫のようになってきました。

この古本の山が「古書市」で全部売れてしまえばいいが、多くは在庫として売れ残ることだらうから、その置き場所を真剣に考えなければなりません。

考えたすえ、緊急避難的にコンテナを借りる

(最終14ページに続く)

ヒアンキの名作『くちばし』

二つの版の謎をとく

第六回

”くちばしこそ

本当の道具”

動物学者 今泉吉晴

ヒアンキの名作『誰のくちばしがもつといいか』の二つの版の読み比べも6回目です。前回、一通り読み終え、私にとつて作品をよく考えるまたとない機会でした。これまでの検討で明らかにできたことがたくさんあります。ヒアンキは緻密に作品を構成し、簡略版の一部の文言を別にして、あいまいな言葉は一切ありませんでした。緩急をつけて文章を運んだと思うと、詩の飛躍で大きな世界を描きだしました。鳥のすみ場所の特徴を美しく描き、謎かけをし、印象的な強調をして、私たち読者に想像力を働かすよさを教えてくれました。それらの表現上の工夫がうまく機能しているかどうか、二つの版を分ける分水嶺でした。一見似て見えるオリジナル版と簡略版にじつは大きな違いがある原因はそこ

に見つかりました。

今回は、二つの版を初めからふり返り、それぞれの特徴をつかみます。合わせて福音館書店が「新たな試み」として「以前『こどものとも』で出た絵本を、もう一度別の視点でとらえ直して、科学の本として新たに出版する」(「母の友」2006年2月号)とした、田中友子氏による新訳「くちばし どれが一番りっぱ？」の特徴をつかみます(「こどものとも」とは、田中かな子氏がオリジナル版から訳した『くちばし』、「こどものとも」1965年10月号、藪内正幸・絵をさす)。

すなわち、この翻訳絵本が底本にした簡略版のよさ(特徴)をどう伝えているか、を検討します。

そこで、二つの版をふり返る際に、新訳も比較の対称に組み込み、三つを比べてみることにします。翻訳とは、外国語の作品をできるだけ忠実に日本語に移す作業ですが、二つの言語の違いから原作を変える部分が生じ、一種の改訂版になります。

私は『ネバーランド』8巻で新訳を批評しましたが、誤訳の指摘にとどまりました。今回は、すでに連載で新訳を部分的に取り上げて、作品内容に踏み込んで批評していきます。ここで新訳を比較の対称にすることで、さらにいくつかの項の内容を検討できます。

ヒタキが主人公である理由

ヒアンキはなぜ、ヒタキを物語の主人公

に選んだのか、振り返りの冒頭で考えておきたいことのひとつです。

この物語はヒタキが飛ぶ虫を追って、捕らえる場面から始まりました。最初の3場面(ヒタキ、シメ、イスカの項)で、ヒタキのトリックスター(いたづらな)こととし、秩序を一時的に破壊する役(ぶりが明らかになり、なぜヒタキが主人公なのか、そのワケも分かるような気がしてきます)。

ヒアンキは、子どもに身近に感じられて、共感できる小さなヒタキをトリックスターに選び、ヒタキが初めに会おう相手も、鳥の仲間(シメとイスカ)を選びました。そして、後の大きな鳥との出会いでは、ヒタキとの大きさの違いがきわだって、画家の制作意欲をひきだします(私はこのことを画家の津田櫓冬さんに教わりました)。

加えて、ヒタキは空中で飛ぶ虫を捕らえるという、いかにも鳥らしい機敏さとスキルを持っていて、注目に値します。それは体が小さいから可能になった進化の一つの頂点です。そのヒタキが才能のよさに気付けないで悩んでいます。

リアリズムのヒタキの項

ヒアンキはヒタキの項の語り手として登場しますが、後の進行はヒタキにまかせ(途中もちろちら存在を示しますが)、最後のしめの場面で再登場します。ヒタキは最初の場面で、虫を捕らえる精悍な捕食者としての姿を読者に見せます。ヒタキは言葉を発せず、説明はもっぱら著者の語り

よっています。

オリジナル版では、「(ハエかガが飛んでくると)ヒタキはすぐさまぱつと翼をひろげて飛びたち・・・虫をつかまえて食べました」と、追跡の様を緩急のある文章で描きました。簡略版では、「ヒタキはすぐに追いかけて捕まえ、飲み込みました」と、飛んで追跡する様子がぶかれ抽象的です。

そして、田中氏訳では「ヒタキはさつと飛び上がり、あつという間に捕まえ、飲み込みました」と、「飛び上がり」と「あつという間に」がつけ加えられ、オリジナル版に近づけてあり、簡略版に必ずしも忠実とはいえないところに注目しておきましょう。

ヒタキの人間的な悩み

続くシメの項で、ヒタキが日々のくらしに不満をもつ人間的なキャラクターを持つ、と分かります。そこでシメは自慢のくちばしでサクランボの実を「パチッ!」と割ってみせました。このシメのくちばしの素晴らしさを伝える記述が簡略版では省かれ、田中氏訳にもありません。

くわえて田中氏訳では、簡略版にもある「枝の同じところにとまったままでいい(文章9)」が省かれています。ヒタキがいちいち飛びたつて虫を追うのに対して、食物の入手が楽であることを明かす記述であり、なぜ省いたのか疑問です(ヒタキ、シメ、イスカには樹上で食物をとる、とい

う共通点があり、枝との関わりの記述は重要です。

私がビアンキの記述に魅力を感じるの、このような細部の描写がしっかりしていることです。削除するとは、気がしれません)。続いてイスカが、十字のくちばしの働きをみせます。このくちばしの働きについては連載の二回目(7月号)にくわしく書いたので省きますが、簡略版の記述がやや具

体性を欠きます。そして、田中氏訳では、種類名の「ジユウジハシイスカ」の「ジユウジハシ」が省かれ、マツの実の取り出し方も、理解できる記述になっていません。

さらに、イスカのくちばしの働きを見たヒタキの感想「なるほど、君のくちばしの方がよくできているね」(文章8)が「なんてりっぱなくちばしなのかしら!」と、別の文章と置き換えられています。ヒタキはイスカのくちばしの機能に感嘆しているのに、りっぱでは読者にビアンキがいつていることが伝わりません。

最初の3場面のまとめ

シメとイスカはヒタキにつきしたがって、くちばしを見る小さな旅にでました。こうして、ヒタキのトリックスターぶりが明らかになりました。物語の大筋はフィクションでも、くちばしの形態と機能はリアルに記述されます。記述はオリジナル版が優れ、簡略版は機能に興味をもたなくていい、という考えで書かれているようです。

田中氏訳は、部分的にオリジナル版の記述を取り入れながら、一方で省略があり、また、書き換えがあつて、性格がぶれています。「りっぱ」という言葉は題名にも組み込まれ、あえて種々の形容詞などをりっぱに統一し、いわば定型化して使っています。

私の強い批判に対して、田中氏は「当否については異論もあるだろう。最終的な判断は読者の子どもたちにゆだねたい」と書いています。田中氏は子どもの読者をどう考えているのでしょうか。子どもに限らず読者に、ビアンキが書いていないことを書いたとして読ませる、あつてはならないことです。

訳者はビアンキの作品に忠実でなければならず、それが同時に、読者への責任であることを忘れていません。

沼地の鳥たちとの出会い

続く三つの場面(タシギ、シギ、ハシビロガモの項)は、沼地(湿生の草原)にすむ鳥たちとの出会いでした。独特のくちばしの形態と機能の説明に加えて、沼、あるいは草原という、森(枝の上)とは違う鳥のすみ場所が描かれます。ビアンキは草原の特徴をタシギの項でまことに見事に描きました。先に見たときには説明をばいいておきたいと思えます。二つの版にほとんど違いはありません。

1 沼の中からナガハシタシギのくぐもった声が聞こえました。あなたたちはくちばしつてもものが本当はどんなものか分かっていませぬ！ 2 優れたくちばしつてもものは、沼の泥の中を探って小さな虫をつまみとれるように、真つすぐで長くなくてはいけないのだよ。 3 私のくちばしを見てごらん。 4 鳥たちが下を見るとアシの草の間から鉛筆のように長くて、マツチぼうつのように細い くちばしがつきでいていました。 5 ああ、そのとおりだね。そんなくちばしがあったらいいなあ！と、ヒタキがいました。

文章1の「沼の中からくぐもった声が聞こえ」で、沼のアシ（あるいはイグサ）の草むらからタシギの音が聞こえている、と分かります。いつもと違う声です。

*1 Ничего вы не понимаете в носах!— прохрипел из болота бекас-долгонос. — Хороший нос должен быть прямой и длинный, чтоб им козявок из тины доставать удобно было. Поглядыте на мой нос!



*4 Посмотрели птицы вниз, а там из камыша торчит нос длинный, как карандаш, и тонкий, как спичка.

— Ах,—сказал мухолов,—вот бы мне такой нос!

図1

簡略版 タシギの項

二つの版が同じです。簡略版のタシギの絵はくちばしの半ばから先が黒く、沼地をあさっていたと分かります。中が見えない草原の特徴は描かれていません。文章は、タシギのくぐもった声（*1の下線部分）がたよりであることを示唆しています。鳥たちはタシギに「見て」（次の下線部分）と促されて見る（*4の下線部分）と、アシ（次の下線部分）の葉の間からくちばしが突き出ています。

聴覚的な認識の世界から、視覚的な認識の世界への転換です。

文章2で、タシギが実はくちばしを土につっこんで話しかけているから、おかしな声になつていゝ、と分かります（図1のブルーキンの絵のタシギのくち

図1を見てください。簡略版のタシギの項の文章と絵です。この項の前半（*4より前。上の訳文では4より前の3の終わりまで）を規定しているのは、（くぐもった声でいう）です。ヒタキたち一行は草むらの中のタシギの姿が見えるとは思っていません。耳でタシギはどこか、探ります。 私たちも藪から聞こえるウグイスの鳴き声がいつもと違つたらどうするでしょう。目では分かりません。耳を傾け、何ごとかと探るでしょう。そのように藪や草原は見通すことができない本当のジャングルで、聴覚による認識の世界です（そこでウグイスは姿を見せる代わりに大きな声で美しく鳴きます）。つまり、草原ではものを知らうとしたら目ではなく耳がたよりだよ、とピアノキはいつています。文章2で、タシギが実はくちばしを土につっこんで話しかけているから、おかしな声になつていゝ、と分かり

ばしは、先が泥で汚れています）。 文章3で、タシギは頭をあげ、くちばしを草の間から突き上げて、ヒタキたちに呼びかけました。「私のくちばしを見て！」（泥の中から虫を捕らえ、食べた直後の雄叫びでしょう）。 ヒタキたちは、聴覚から視覚に切り替え、何かが見えている、と期待をもつて目を向けます。鮮やかな展開です。こうしてヒタキたちは草原からのぞくタシギのくちばしを見つめました（文章4）。読者はまた、ヒタキたちがアシの草原を上から見ていると知ります。 文章5のヒタキがタシギに同意する言葉「ああ、そのとおりだね」は、タシギが草むらで何をしたかを知つて、優れたくちばしとはこういうもの、というタシギの主張に納得した言葉です。タシギのくちばしのよさが、たつた今わかつた、という賞賛の言葉です。 子どもの読者も、草むらで鳴くコオロギの居場所を耳でさぐつた経験を思い起こし（あるいはかくれんぼ遊びを思い起こし）、鳥をかくす草むらの面白さが分かるでしょう。ピアノキは草原の特徴は何々といったふうには書かずに、動物にも人にも共通した草原の意味を描きました。ヒタキの旅はフィクションでも、草原の描写はリアリズムです。 二つの版が違わない場合、きまつて見事な文章であることには意味があります。一方、二つの版で文章が異なる場合、簡略版の表現の質が劣ることをヒタキの項、シメ

の項で見ました。

さて、タシギの項の新訳は田中氏が誤訳を認めています。それ以上の大きな問題があります。

1「おやおや、きみたち、くちばしのことが何もわかつちやいませんね」声がしたほうを見ると、タシギが沼の中からこちらを見あげていました。タシギはひくい声でいいました。2「りつぱなくちばし」というものは、泥の中の小さな虫をほじくりだせるように、まっすぐで長くなくちやあいけないんですよ。3ほら、ぼくのくちばしのようにね」4ヒタキとシメとイスカがふりむくと、えんぴつのように長く、マツチぼうのように細いタシギのくちばしがアシのしげみからのぞいていました。5ヒタキはためいきをつきました。「ああ、わたしにもあんなくちばしがあったらいいのに」

文章4の下線部分のうち「ふりむくと」は、私の訳では「下を見ると」です。私の指摘でこの部分の誤訳を認めた田中氏は、ケアレスマスとしています（『ネバーランド』誌10巻）。

しかし、田中氏がヒタキたちは耳で草原の中のタシギの様子を知ろうとしている、と分かっていたら、「タシギが沼の中からこちらを見あげていました」などとつけ加えはしなかったでしょう。この文言と文章4の誤訳が重なって、タシギが同時に違う場所にいる、という矛盾に陥りました。

また、読者はこの文言のために、ヒタキたちが耳でアシ原の中のタシギの動きを知ろうとしている、とは読めず、アシ原は見

通しがきかない、というビアンキのメッセージがあることも知りようがありません。

そしてさらに、タシギのいつもと違う鳴き声の意味（作中での効果）は消えてしまいい、読者はタシギの低い声はいつももの鳴き声と解釈するでしょう。一部の文言の追加や誤訳が、誤解の連鎖をもたらし、原作のよさをダメにしました。すなわちタシギの項は、ロシア語原本の二つの版では秀逸な表現でタシギのすみ場所とそこでのくらしぶりを伝えているのに対して、田中氏訳は日本語として文章が矛盾する上、タシギのくちばしのよさをどうしてヒタキが知ったのか、理解できません。

文章5の「ヒタキはためいきをつきました」も、原文は単に「いいました」です。

つづいて第五節「ソリハシシギとダイシャクシギ」の項です。ビアンキはこれら二種の脚の長いシギを「兄弟シギ」と呼んで一つの項で二種類を取り上げました。

二つの版はほとんど同じです。二種類をとりあげたために、一つの種類ごとの説明は簡単になり、その代わり類縁関係が近い二つのよく似た種を比べて、少しだけ違う特徴の意味を問う、という面白さがあります。ヒタキは二つをいっしょに見て、それぞれのよさを納得しました。ヒタキはこういいました。「あなたたちのくちばしよりいいくちばしなんて考えられないね」（ピツポ新聞7月号4ページ・文章6）

どちらもいい、と単純にいつているのはありません。上にそるか、下にそるかの

違いが、食物の捕り方の大きな違いになっている、その機能の絶妙な対照を含めていい、といっています。

第三の版、田中氏訳では、最後の文章6がこう訳されています。「あなたたちのくちばしよりりつぱなくちばしつてあるかしら」つまり「いい」が「りつぱ」になっていきます。機能の絶妙な対照を含めた評価です。から、「りつぱ」はナンセンスです。

一度にたくさん 食物を手に入れる技

つづいてビアンキは、一度にたくさん食物を手に入れる鳥たちのくちばしを紹介しています（ハシビロガモ、ヨタカ、ペリカン。ピツポ新聞7月号、8月号参照）。それぞれに複雑に特殊化したくちばしの頂点といえ、ヒタキにとつては垂涎の的でしょう。

まずハシビロガモの項ですが、二つの版で内容が違います。簡略版には、オリジナル版の文章のうち文章7、9がありません。文章7、9はシャベルのような形のくちばしが、食物を濾過して大量にとる機能を持つことの説明です。つまり、簡略版はハシビロガモのシャベルのようなくちばしの形を紹介しただけで、どう使われるかを伝えないうで終わります。

私はキツツキの項の検討で、オリジナル版を削って簡略版がつけられた、と考えた方が合理的と思える証拠を示しました。この項も、文章7、9は必要ない、という考えの何者が削った、と見るほか合理的な

説明は難しいでしょう。

*1 Да ты, видно, настоящих-то носов и не видал, — крикнул из лужи широконос. — Смотри, какие настоящие носы бывают: во-о!

Все птицы так и прыснули со смеху прямо широконосу в нос: — Ну и лопата!

*6 Зато им воду щелокчить-то как удобно! — досадливо сказал широконос и поскорей опять кувырнулся головой в лужу.

*7 Набрал полный нос воды, вынырнул и давай щелокчить: воду сквозь края носа пропускать, как через частую гребёночку.

*9 Вода-то вышла, а козявки, какие в ней были, все во рту остались.



図2
オリジナル版 ハシビロガモの項

簡略版には*7以下の文章がなくて、*6の「頭を水に入れました」で終わります。*7以下の文章は、口も含んだ水を濾過して食物をとりだすくちばしの働きの説明です。簡略版の読者は水を濾すために頭を水に入れたのだろう、と想像できても、濾すとはどういうことか、濾して何になるのかは分かりません。なお、図を引用したロシア語原本は、福音館書店科学書編集部から『くちばし』の底本（オリジナル版）、『くちばし どれが一番りっぱ?』の底本（簡略版）として、コピーをいただいたものです。題名、刊行年、その他の書誌は編集部にお問い合わせください。

訳文「すると水のなかの小さな生きものがぜんぶ口のなかにたまりました」（文章9）に「ブウ」を付けもらいました。

訳文「すると水のなかのブウ小さな生きものがぜんぶ口のなかにたまりました」と訂正してください。

この部分は著者による

説明文です

ハシビロガモの濾過摂食の仕組みを理解することは、引き続き登場するヨタカ、ペリカンの摂食のスタイルを理解する上で重要なヒントになっていきます。ビアンキが説明を落としたとは考えにくいことです。この項にはもう一つ、二つの版で違いがありました。図2のロシア語原文*6などに「TO」という語尾がつけてあります。私はこれをオリジナル版に独特のカモの話し方のくせの表現と見て「ブウ」と訳して、訳文の末尾などにつけ加えてあります（文章6など）。オリジナル版の文章が話し言葉をまじえた親しみやすい表現になっている一つの例です。

この「TO」は、ロシア語原文*9にもつけられています（ ）が、私は

から、著者がつけたカモのくせ（キヤラクター）を著者がまねてみせるユーモアです。このようにオリジナル版は、記述の内容が豊かで美しいばかりか、子どもの読者に親しみやすい口語調である特徴があります。この項もオリジナル版が優れているのは明らかでしょう。

田中氏訳はどうか。私はこの項の翻訳上の問題を『ネバーランド』誌8巻で詳しくとりあげたので、ここでは若干の確認にとどめます。まず、最後の文章が明白な誤訳であることは田中氏も認めています。すなわち、私の訳文の文章6「さつと頭を水に入れました」に相当する文章が、「えさをさがしに頭から池にもぐっていききました」

と訳されています。

私が『おしゃべりなもり』について多数の誤訳を指摘したのに対して唯一認められた「ネズミ」を「モグラ」と訳した誤訳と同じく、事実と反することが明らかであるがゆえに認められた誤訳の一つです。

田中氏はまた、私の訳では「でもこのくちばしは水を濾すには便利なんだがなブウ」とハシビロガモはいじけていました。これ水ですくってすきまからこぼしていくと、えさが口の中にくるんだぞ」と訳しました。すなわち、簡略版にはオリジナル版の文章7、9がなくて、濾すという行為の説明がありません。それをこの部分で補いました。私が、簡略版を選んでいるのに、補うのはおかしい、と批判したのに対して、田中氏は「難しい言葉を子どもに分かるように言い換えることが非難に値するとは考えない」と反論しました。しかし、つじつまがあいませぬ。簡略版を選び、藪内氏の絵を左右の逆版にしてまで、簡略版の筋に合わせました。部分的にオリジナル版のよさを取り入れるなら、最初からオリジナル版にすればよかったです。版が一つである通常の翻訳の場合の語句の説明とは事情が違います。

おまけに、田中氏は簡略版を選んだ理由にオリジナル版の文章7、9の濾過の説明をさして「ハシビロガモのくちばしについての長い説明」といい、これが物語の「クライマックスに向かつて淀みなく進む話の流れ」を中断する、とまでいつています。

何と浅い硬直した解釈でしょう。

田中氏訳のこの項は、誤訳と改竄、それに藪内氏の絵を逆版にしたことなど、問題だらけです。

大量捕獲の優れ技

つづく第七節ヨタカ（ピッポ新聞7月号）と第八節ペリカン（ピッポ新聞8月号）は、大量の獲物を一度に捕獲できるくちばしの代表です。それぞれピッポ新聞でくわしく扱ったので、結論だけ確認します。ヨタカの項は、オリジナル版が、夜空を飛んで虫を群れごと捕らえる大口の秘密を見事に解き明かしてくれませんが、簡略版は大幅に簡略化されていて、肝心の虫の捕らえ方が分かりません。ペリカンの項は二つの版が同じ、という対比が見られました。簡略版の記述は、一つの作品としてバランスがとれています。

田中氏訳のヨタカの項は、簡略版が例えば「僕のくちばしは小さいけれど網と喉の役目をしてくれます」（文章2）となっていて、なぜ、くちばしが網と喉の役目をはたせるのか、説明がないところを、オリジナル版からおぎなつて「私のくちばしは小さいけれど、まわりにひげが生えているんです。夜それを網のように広げて、地面すれすれに飛ぶ」といったように訳しています。

私がオリジナル版から補うならなぜ、底本を簡略版にかえたのか、と批判したのに対して、田中氏は簡略版の原文からでもこ

のように訳せる、と強弁しています。けれど、そんなことを繰り返しては、文章の改変くせがついてしまいます。おまけに、続く「地面すれすれに飛ぶ」は誤訳であり、事実にも反します。

田中氏訳のペリカンの項で、ペリカンのくちばしに、いざという時のために食物を貯える機能があると訳す大きな誤訳がありました。単なる誤訳ではなく、文脈をとらえそこねたための、全文に影響する意味の取り違いです。

巻末に、関連する編集部による注記があり、田中氏の訳文を原文に忠実な訳とみて、（くちばしに食物を貯える機能がある、となつているのは）原文の誤りとしています。ビアンキの執筆当時には、そのような説があり、それに従つたためであろう、と誤りの原因にもふれています。私にはビアンキが自分の目で見ていないことを書くとは考えられず、注記を批判しました。

私はまた、福音館書店書籍編集部長に、注記の判断のもとになつた文献があるなら教えてほしいと伝えていきます（ピッポ新聞8月号）。二回催促しましたが、担当編集部に伝えてある、今、担当編集部は忙しいのだからという理由で、文献は示してもらっていません。私は連載のまよりの時にはペリカンのくちばしによる貯蔵と注記の問題について、よりの確な説明ができるかと考えていましたが、そうはいかなくなりました。

物語の転換点、キッツキの項

キッツキの項は、物語の転機になつていきます。ヒタキは、キッツキにくちばしを見てと言われ、どこを見たらいいの、と問い返しました。続いて出会つた鳥のくちばしについての感想を語つた上で、キッツキのくちばしには、これといった特徴がない、といひます。

この語りから、読者はヒタキがくちばしについて何を知つたかを理解します。それがこの項の前半の内容で転機の前提です。ここまでは、二つの版は同じです。

後半は二つの版で文章が違い、転機が二つに分かれます。簡略版では「食物のことがかり考えてはいけけない」というキッツキの一言が流れを決めます。キッツキは食物獲得とは違うこと、他の鳥のためのすまい作りもしている、という文脈です。ヒタキがいくら虫をとつてもたりないと嘆いたことで始まつた物語ですが、加えられた一文は別のテーマの提示であつて、転機といつてもテーマがぶれました。

一方、オリジナル版は、食物の入手をはじめ、あらゆる森の仕事にくちばし一つでこなしている、という文脈で、謎かけの形で話が進みました。人間があらゆる道具を駆使して成し遂げる大仕事を、キッツキはくちばし一つでこなしている、といい、道具としてのくちばしの優越性を誇ります。

出会つた鳥たち全てと異なる性格のキッツキのくちばしのよさを見て、一言もなく、いよいよ分からなくなつたヒタキが次の場面です。鳥たちに並んでもらい、一番を決める、というふうに変換していきます。

田中氏訳は、相変わらず原文にない言葉を加えています。「ヒタキはばかにしていいました」という言葉を加えて文脈を乱し、ヒタキの品位を落としました（ピッポ新聞9月号参照）。

以上の検討から、この項は簡略版を圧倒するオリジナル版の要です。簡略版は物語の大枠が揺らぎました。加えて、文章の展開の工夫で劣ります。オリジナル版は、人間の道具に優るとも劣らない鳥のくちばし、というキツツキの着想を提示しました。

ちなみに、この考えを発展させたのが、もう一つのくちばしについての絵本『斧をもたない匠』（『Master Bez Topora、1952年』）です。

一気に上り詰める結びの項

ヒタキが旅を共にした鳥たちに、一番のくちばしを選ぶから一列に並んでほしい、と呼びかけます。物語が一気に上り詰めるしめの項です。ヒタキが鳥たちに語りかけます。たくさんの素晴らしくくちばしに出会った、と感激を述べます。この「素晴らしく」には、食物の入手が効果的にできるくちばし、というだけではなく、くちばしに対する美的な賛美が含まれています。

ラルフ・エマソンは、「自然は不思議に似ていて、なお独特な形あるものたちの海です」といっています（Nature、1836）。くちばしも自然が生み出した形あるものの一員です。エマソンは続けて、「それら形あるものたちには完全さと調和とい

う共通の印象があります」といい、「それから完全さと調和が、すなわち美です」としました。

完全さとは、くちばしの働きの真実（本当に機能していること）であり、調和とはくちばしが自然の中（鳥それぞれのすみ場所）にあつてこそうまく働いている、という善さの認識でしょう。

エマソンは美についてのこの議論の最後で「真実、善さ、それに美は同じ全体の違う側面にすぎません」と書きました。ヒタキが鳥たちのくちばしの形態と機能を知つて、なるほど本当だと真実を受けとめ、あるいは、すみ場所との調和を感じとつて善きものと思ひ、そして大いなる喜びをもつて美しいと感じた、その全体をヒタキは素晴らしいと表現した、といえます。

そうであるなら、オリジナル版によるくちばしの形態と機能のていねいな記述が価値（表現）であつて、簡略版のバランスを欠いた記述は読者に、ヒタキが何に感動したかを伝わりにくくしているでしょう。

そして物語はつぎのステップに進みます。ヒタキは鳥たちに並んでもらい、一番いいくちばしはどれか、見定めようとなりました。ところが意外なことに、ヒタキはタカにさらわれ、最後の一文「というわけで、誰のくちばしがもつといいか今も分かりません」で、物語は終わります。作者は、ヒタキがどんな判定を下したか、読者の想像にまかせました。

用意を整え、あとは読者の想像にまかせると、というビアンキの作風は自然を知ろう

とする誰もが現実の場面で実行している観察の手法、わずかな証拠から大きな全体をつかみとる、に起源をもつています。その記録（日記）は、決まってわずかな字数の記述で世界を伝える、実際の表現になります。ビアンキはその表現を詩的に洗練させ、文学にしています。

ヒタキの判定はどうだったか。私は、結びの項をあつかつた前回の検討で、最後の一文のおかげで読者は、くちばしのよさをもとも比べられない（判定できない）と理解することになる、と記しました。

でも、鳥たちに並んでもらつたヒタキがどう判定したかは、別の問題です。私はここで、ヒタキがどう判定したか、想像してみたいと思います。

ヒタキの前に並んだ鳥たちは、博物館の展示標本のようでした。自分のすみ場所の実際のくらしの場面から離れていては、美しさのもと、道具は使われてこそ美しい、が見えませんか。そこで、ヒタキはこう考え、たかもしれません。三つの可能性がある、と私は想像しました。

一つは、まさに標本のようで機能美が見えず、ますます分からなくなつた、と想像します。ヒタキは呆然と立ちつくし、タカにさらわれました。もう一つは、どれがいかが本当には決められないのは、どんな場合も同じ。決めるとは偶然であり、ヒタキもふと気持が動いて選べたかもしれません。さらにもう一つの可能性ですが、ヒタキは自分のくちばしが一番と気付いた、と想像します。

といったふうに、想像は自由ですが、ヒタキに教えてもらうことはどんな権威者にもできないのです。

オリジナル版の特徴

以上をまとめるとこうなります。オリジナル版は、鳥のくちばしと食物の入手の仕方との関係を明らかにする小さくて大きな動物学書であって、くちばしが用の美をあらわす自然の造形であることを詩的な言葉で語ります。鳥のくらしと自然の調和を美しく、楽しく、豊かに伝えます。ビアンキの言葉は、出会った自然からじかに受け取った強さがあり、私たちの日々の観察の記録もまた、世界を簡潔に記述する力強い表現になっていることを伝え、励ましてくれます。

思索と想像をさそい、読めば読むほど手応えがあつて、読書の楽しみを教えてください。珠玉の小品です。

簡略版の特徴も見えてきました。簡略版の基本的な性格は、オリジナル版の文章を一定の判断基準で切り詰めて作られています。そのため説明不足や表現のちぐはぐさが目立ち、鳥のくちばしと食物のとり方についての知識の本になっています。

すなわち、深くは考えず、想像力もおさえて読んだらいい教科書のような本で、実際、読み方の教材として使われた版だったでしょう。

私はこの論を、簡略版が出版された1923年に、すでにオリジナル版の準備があつ

た、という仮説の下に進めました。今回の連載でも、私の仮説を支持する事実がいくつも見つけられました。しかし、私の仮説の当否にかかわらず、後に刊行されたオリジナル版が優れた作品であることに変わりはありません。

『星の王子さま』新訳の衝撃

結びの項とまとめて田中氏訳をとりあげなかつたのには、ワケがあります。二つの版と比べてきて、田中氏訳にはどの項にも改変と誤訳があり、ロシア語版の二つの版のどちらとも大きく違っていました。結びの項まで、二つの原作と比べてはビアンキに失礼です。

岩波少年文庫版『星の王子さま』（内藤濯訳、1953年）の日本語版の出版権が消失して、2005年6月以降、新しい訳本が十数の出版社から続々と刊行されました。刊行ラッシュから遅れて出た14番目の新訳、三田誠広氏訳の講談社青い鳥文庫版について、「憂い顔の『星の王子さま』」（書肆心水、2007年）の著者「加藤晴久氏は、こう書いています。「これはしかし、翻訳とはとても言えない・・・外国語の作品を翻訳しようとしたら、まずは、テキスト原文の語句・表現の明示の意味と暗示の意味を正確に理解する、また、テキスト内の語句・表現の呼応連関を把握する努力をしなければならない。」ところが・・・この訳者にはその気がまったくない」。私もこの連載で、文章の呼応関係を見る

大切さを強調してきましたが、最近読んだ加藤氏の文章をここに引用したのは、翻訳の基本が端的に、切実に書き表されているからです。この明晰な認識が田中氏訳の結びの項を見るには必要です。

ビアンキではない結びの項

実は、田中氏訳の結びの項にはあまりに多くの文章のつけ加えがあつて、別に検討する必要がありました。長くなっているの、前半と後半に分けて検討します。番号は私の訳文と比較するときの便宜のためにつけました。下線部分がロシア語原文にはなく、田中氏による付け加えです。私の訳はピッポ新聞 月号にあります。

結びの項 前半

1 「まあ、なんてすばらしいんでしょう！」と、ヒタキはいいました。2 「うーん、いろんなくちばしがありすぎて、どのくちばしが一番りっぱなのか、わからなくなってしまうわ。3 ねえ、みなさん！ 4 ならんでみてください。5 わたしがおう一度よく見て、一番りっぱなくちばしをえらびますから」6 ヒタキの前にシメとイスカ、タシギとソリハシセイタカシギとダイシャクシキ、ハシピロガモとヨタカとペリカン、そしてアカゲラが一列にならびました。

前半部分には、大きな問題が四つあります。一つは明白な誤訳で、一番と訳したらいいところを、田中氏があえて「一番りっぱ」としています。どう理由づけをしよう

とビアンキはそうはいっておらず、読者に違う意味を伝えるのですから、誤りです。

第二に、同じ文章2で、「うーん、いろんなくちばしがありすぎて」とあって、「一番りっぱ」が分からなくなつた理由として、「いろんなくちばしがありすぎ」としているのも誤訳です。読者はヒタキが混乱して分からない、と考え、それなら落ち着いて見れば分かる、と誤解します。

第三に、原文では、「ハシボソヒタキ」とか、「ハシブトシメ」といつたように、著者がこの物語がぎりでつけた仮の種類の名で、一列に並んだ順に鳥の名が列挙されます。これまでの訳者は、これらの種類名を、鳥のくちばしの形容詞とみて、「ほっそりしたくちばしのヒタキ」（田中かな子氏の訳）といったように訳してきました。

私は『ネバーランド』誌8巻の批評で、これはビアンキが図鑑の命名方法をまねながら、今日でいう生態学の考え方で同じくらしをする近い種類をまとめて呼ぶためにつけた名前と指摘しました。

例えば、キツツキの場合、「つつきくちばしのキツツキ」（田中かな子氏の訳）とありますが、それは木の幹をくちばしですついて穴をあけるキツツキの仲間の全てをまとめて呼ぶ名前であり、「キツツキハシキツツキ」とでも訳したらいいものです（和名ではキツツキがもともキツツキハシの意味で重複しますが、種類名にある程度の矛盾や重複はつきものです）。

私の指摘に対して田中友子氏は、名前が長くなる、子どもに分かりづらい、矛盾し

た名前になる場合がある、と理由をあげて、分かつていたがえて採用しなかつた、というニュアンスで反論しています（『ネバーランド』10巻）。だが、強弁でしょう。

ビアンキの先進的で創造的な提案を些末な理由で排除しては翻訳家といえません。特に子どもに分かりづらいからやめたとは、何と不見識な理由でしょう。子どもの読者こそがビアンキの遊び心と自由な精神（科学の精神）を喜ぶでしょう。

第四に、これは第三と根っこは同じですが、鳥の種類の名を例えばアカゲラといったように、藪内さんの絵に描かれた鳥の種類にあわせて作品中の鳥の名を訳したら（田中氏は『ネバーランド』に絵に描かれた鳥の種にあわせた、と書いています）、それは明白な誤訳です。田中氏は動物の種と類の関係が分かっています。

藪内さんは田中かな子氏が訳したビアンキの物語を読み、「つつきくちばしのキツツキ」とあって、これは類概念と分かつたでしょう。どのキツツキを描いても大丈夫、と判断し、好みのアカゲラを描きました。読者は絵を見てアカゲラと分かつて、文章を読んで「つつきくちばしのキツツキ」に共通のことが書いてある、と理解するでしょう。

しかし、次の訳者が藪内さんの絵に合わせてビアンキの作品中の種類名（キツツキ）を種名（アカゲラ）で訳しなおしたら、誤訳です。田中氏は「つつきくちばしのキツツキ」の「つつきくちばしの」も削除してしまい、アカゲラとしたので、読者は他

のキツツキでも同じかどうか、想像する自由も制約されました。

これが科学絵本として訳したらどうなるか、という期待の新訳の翻訳水準とは驚きです。私が田中かな子氏の訳にもどすべき、という根拠はここにもあります。

結びの項 後半

鳥たちがびっくり仰天したワケ

後半は以下のようになっています。

さあ、どのくちばしが一番りっぱでしょう？ 7そのときです。鳥たちの上を黒いかげがよこぎったかと思つと、するどいくちばしのオオタカがさつと空からまいりました。そして、がんじょうなつめでヒタキをつかまえ、あつという間にとびざりました。

みていた鳥たちは石のようにかたまつたまま、しばらくじつとしていました。それから、はつと気がつくくと、「あのくちばしでひききかれたらたいへんだ！」と、8大あわてでにげていつてしまいました。そのにげあしの早いこと！ 鳥たちのすがたは、もうどこにも見あたりませんでした。

後半部分は、原文の跡形もなく改竄されました。傍線部分は、ロシア語原文に相当する文言がない、と思える文章です。もともとは一つの文章からなる簡潔な終わりですが、その倍ほどの文字数のいくつかの文章を加えられて、散漫な構成になつていきます。もとは短い文章ですので、私の訳をここに示しておきます。

7その時、突然、空からカギハシオオタカが急降下してきて、ヒタキを捕まえると唇に飯を持っていつ

てしまいました。8後に残った鳥たちはびっくり仰天、あちらへ、こちらへと、飛びちって、逃げていきました。

田中氏訳には、後半のキーワード、文章8の「びっくり仰天」が見あたりません。私は「大あわてで」が相当する言葉だろうか、と思いましたが、田中氏の説明によるとそうではないようです。

私が文章のつけ加えを批判したのに対して、田中氏はおおよそこのように答えています。（文章をつけ加えたのではなく）ロシア語原文にあるニュアンスを読者に分かりやすく「説明し」、緊張に満ちた「状況を描き出し」、くちばしの「鋭さを間接的な表現で強調し」、あるいは、幼い読者に恐怖感を与えないように「微調整した」のであって、「原文の『構成を変えた』つもりはない」。

明白な事実を指摘するより仕方ありません。「原文の『構成を変えた』つもりはない」といいますが、これだけ文章をつけ加えて、構成が変わっていない、などあり得ません。

例えば、右のうち「緊張に満ちた『状況を描き出し』」とは、私の訳の文章8にある「びっくり仰天」を、「易しい言葉だけで表現するために一瞬が長く感じられる緊張に満ちた状況を描き出した」として、田中氏訳の8の文章のうち「みていた鳥たちは以下「はっと気がつく」とまでの文章に言い換えた、と説明しています。

しかし、「びっくり仰天」を長々と言い換える必要がどこにあるでしょう。そもそ

も、「びっくり仰天」が読者に伝える意味は、「一瞬が長く感じられる・・・状況」などとはまったく違います。

ここまで物語を読んできた読者の最大の関心は、なぜ突然、ヒタキがタカに捕まったのか、でしょう。「びっくり仰天」はその関心に答える唯一の手がかりです。すなわちこの言葉は、鳥たちみながタカの来襲に気付いたのは、ヒタキが捕まったからだ、と読者に伝えていきます。

つまり鳥たちの情けない注意力を物語っています。あつてはならない事態であつて、ヒタキが捕まるまで気付かなかつた自分たちへの驚きであり、何と間抜けなことをしてしまったものだ、という反省であり、ひいては出会いの旅への反省です。

いつもの鳥なら周囲の状況にたえず目を配り、仲間の鳥の様子もよく見ています。一羽が気付けば、警戒声とその様子から種を越えて鳥に情報が伝わり、誰もがタカの来襲にそなえるでしょう。そうなれば、タカの襲撃をかわすのは難しくありません。ところが、仲間たちの中の一羽も、事前にタカの接近に気付くことがなく、分かつた時にはヒタキが捕まっていた「びっくり仰天」したのであり、鳥たちはまずは飛び散り、そして自分たちのすみ場所へこそそと逃げ帰りました。「みていた鳥たちは石のようにかたまつたまま」とは、捏造もいいところです。

後半の訳文について書くべきことは、たくさんありますが、二つの版との比較のための検討には、一例で十分でしょう。田中

氏訳は、翻訳とはいえませんが、福音館書店は田中かな子氏が訳した『くちばし』の刊行をやめて、田中友子氏の『くちばし』どれが一番りっぱ？』を新たに刊行しました。適切な判断だったといえるはありますがありません。

ヒタキが消え去ると同時に、トリックスター、ヒタキに担われた一つの物語世界が終わったのです。残った鳥たちの帰宅をいそがせ、オリジナル版の終わりの一文「というわけで誰のくちばしもつといいか、今も分かりません」ではつきり物語の終わりを告げる必要がありました。

ピアンキが自然との交流を通じて心に育んできたくちばしとは何か、という心象を表現した物語が終わりました。この短い文学作品のおかげで、子どもと子どもの心を持つおとなの誰もが物語の全体を掌握し、くりかえし反芻して楽しみ、そして鳥を目にするたびにピアンキと言葉を交わすことができるのです。

以上で、ピアンキの名作『誰のくちばしがもつといいか』の二つの版の読み比べが終わりしました。私は引き続き、オリジナル版の訳文の推敲をし、ピッポ新聞を通して、読者のみなさんにお届けします。

読み比べという性格上、オリジナル版の文章を整えることが十分にはできませんでしたが、タシギの項の草原の特徴の訳し方をはじめ、最後の「一番」をめぐる物語の展開のとらえ方など、さらに工夫してみます。

また、今回は、もともとは二つの版の読み比べを目指したものでしたが、『ネバーランド』誌が、田中友子氏の反論に対する私の再反論（紛らわしいので以後、私の反論を再反論と呼びます）を拒絶したことからかなりの部分を、再反論にあてることになりました。でも、再反論としては部分的です。

というのは、田中友子氏は反論で、私の批評に半分しか答えていません。私は田中氏が福音館書店から刊行した『おしゃべりなもり』と『くちばし どれが一番りっぱ？』の二つの作品について批評しました。

二つは共に田中氏の翻訳に対する姿勢（作風）を示していますが、どちらかというところ、藪内氏の絵を継承した『くちばし どれが一番りっぱ？』より、田中氏が代理人をつとめるN・チャールシナ氏の絵がついた『おしゃべりなもり』の方が、姿勢をつらぬけたでしょう。『ネバーランド』誌は田中氏がまだ答えていない『おしゃべりなもり』についての反論を歓迎するはず。ぜひ書いてください。

第三作『どづぐは なくても』の扉の絵の衝撃

反論を待つ私が今すぐしたらよいことは、田中氏の第三作、『どづぐはなくても』（V・ピアンキ原作、田中友子文、N・チャールシナ絵、2007年4月刊行）の批評にとりかかることです。

いての批評を、『ネバーランド』誌から依頼されました。しかし、掲載を延期され、ついには拒絶されました。私は当初、三作を批評して、ピアンキ作品の翻訳出版について、福音館書店と訳者の姿勢を問うつもりでした。

今回は紙面もつきていきますので、私が衝撃を受けた、『どづぐはなくても』の最初の部分をとりあげます。原本は旧ソ連で1952年に刊行されたMaster Ben Topora（『斧をもたない匠』）です。斧一本で丸太小屋を造る開拓者に対して、斧を使わない丸太小屋造りの名人がいる、と分かる題名です。



かなづち のこぎり かんな のみ。
いえを たてるときには どうぐを つかいます。
でも どうぐを つかわないで たてられた いえも あるんです。
どんな いえでしょう？

図3
『どづぐはなくても』の扉（部分）。V・ピアンキ原作、田中友子文、N・チャールシナ絵
2007年4月刊行より。

くわしい紹介などは次回にしますが、この作品は、先に出版された二つの作品に比べて、私の批評がたあとに刊行されま

した。そのため、私の批判にこたえて奥付にロシア語原本の記載がのりました。

おかげで原本がすぐ分かり、うれしいことに私も持っていました。田中氏が訳した三作品は、どれもピアンキの代表作であり、最高の逸品ぞろいです。私はいったい誰が選んだのか、と感嘆しました。

けれど、題名の「道具はなくても」は斧を道具に置き換えており、いったいどういうことか、と疑問がわきました。そして、表紙を開くと扉に丸太小屋の絵があり、驚いたことにたくさんの大工道具が描きこまれています（図3）。丸太小屋といったら、斧一本で造るといイメージが台無しです。

扉の下から始まる文章を読んでみましょう。

かなづち のこぎり かんな のみ。家を建てる時には道具を使います。でも、道具を使わないで建てられた家もあるんです。どんな家でしょう。

答えは、鳥の巣です。

なぜなのよつですが、答えがすぐにあつて、何のための問いか、と疑問です。それに、答えは鳥の巣、といわれて納得する人がいるでしょうか。鳥が答えなら、動物はみな道具を使わずに家をつくるのだから、おかしいと思うのではないのでしょうか。

疑問はさておき、ロシア語原文からの私の訳をみてください。

手を使わず、オノも使わずにたてる小さな家って、なあに？ぼくはなぜなぞをだされました。うーん……えっ、そうか。なるほど「鳥の巣」ね。

ロシア語原文にははつきりなぜなぞと書

いてあります。それに説明口調ではなく、主人公がいます。問いの中身も違っています。「手を使わず」が一つの決めてであって、鳥を示唆しており、それが田中氏訳にはありません。そのために、動物はみな道具を使わずに家をつくるのだから、おかしい、という疑問が生まれたのです。田中氏訳は論理が初めから破綻しています。その上、私は発見したのですが、この作品でビアンキが取り上げたなぞなぞは、福音館書店が刊行している絵本『なぞなぞ100このほん』の30番に登場する古典的ななぞなぞでした(図4)。松谷さやか氏の訳でこう書かれています。

でも おのも つかわずに かわいい おうちが できました



図4

『なぞなぞ100このほん』(M・ブライトフ採集、松谷さやか編・訳、M・ミトゥーリチ絵)より、30番のなぞなぞと絵。

念のために書きますが、私はあら探しを

しているわけではありません。単にビアンキ作品を読みたいのです。最初に出てくるなぞなぞが古典的ななぞなぞと分かれれば、ビアンキがいつそう親しく感じられるではありませんか。

おかしな訳であったり、言い換えがあったり、削除があったり、これでは安心して読めません。すでにふれたとおり、『斧をもたない匠』は6回にわたって検討してきた『誰のくちばしがつもつといいか』と深く関係する内容の作品です。初期の作品である『誰のくちばしがもつといいか』に対して、こちらは晩年の作です。『つたいビアンキはこの作品でくちばしについて何を語っているのか、非常な興味をそそられます。さて、『どろくはなくても』は、先の二作品に対する私の批評に答えて、奥付にロシア語原文の書誌を入れました。もう一つ、私の批評への対応か、この作品は表紙に、「田中友子 文」(これまでの二作品は「田中友子 やく」と印刷されています。「文」とは何か、次回から合わせて検討します。

ね、この本読んだ?

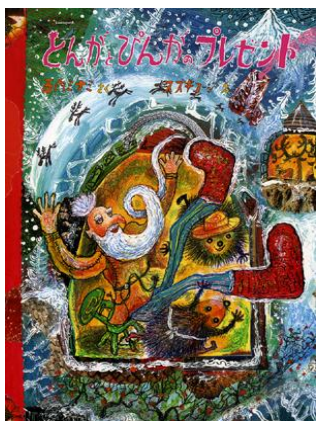
『てぶくろがいっぱい』(フロレンス・スルボドキン・文 ルイス・スロボドキン・絵 三原泉・訳 1260円 偕成社) 果たこの一人がてぶくろを片方なくしてしまった。うわさをきいた町のひとたちは、その赤い手袋がみつかるたびに双子の家に



て、双子のてぶくろはもともと一組づつしかないことがわかった。さて、集まった手袋をどうしよう? いいことをおもいつきました……。なにげない人びとの暖かな気持ち

届けてくれる。いつしかてぶくろがいっぱいになってしまった。両親が旅行から戻ってきた

『とんがとびんがのプレゼント』(西内みなみ・作 スズキコウジ・絵 1575円 福音館書店)



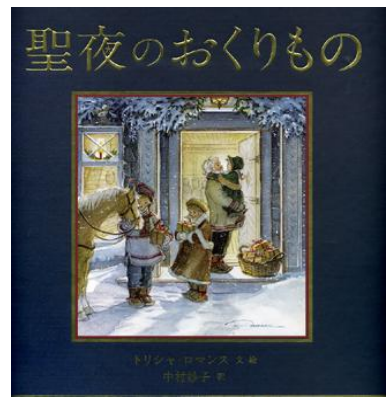
2ひきのはりねずみの夫婦とんがとびんがはニコラスおじいさんと山奥で暮らしていた。他の人にプレゼントをするばかりのおじいさんをおもって、

2匹は良いことを思いついた……。この絵本は「こどものとも」(153号)として司修さんの絵で出されたが、40年ぶりに再改作されてコージさんの絵で再刊されたということなのです。

『聖夜のおくりもの』(トリシャ・ロマン

ス・作 中村妙子・訳 1995年 岩波書店)

間もなく今年もクリスマスがやってきます。



プレゼントをもらう子どもたちも、渡す側も、プレゼントするってことはどういうことなのか、さらに、もっと根本に戻って人間の暮はどういうものだったのか、はたまた神を信ずるってどういうことなのか、ということのかなど、もう一度今年はか

んがえてみたらいかがでしょうか? それにはこの絵本『聖夜のおくりもの』がおすめです。足が地についた暮らしてもを思い出させてくれる絵本です。



『エルマーとりゆうすごく』(R.S.ガネット・作 R.K.ガネット・絵 580円 福音館書店) エルマーシリーズ出版50周年ということので3冊セット7500円も

(1ページからの続き) ことをおもいつきました。「古本市」が終

わったとき、残った本をここに運び込む段取りにしたのです。これが今回の一番の投資でした。

どういふ本を出品したら 売れるのだろうか?

道具が整ったところで、さて、どういふ本を出品したら売れるのだろうか? ここが肝心なところです。

古本市としての腕の見せどころだ。なんつて大見得を切ったところで、多少なりともわかる分野は、「子どもの本」しかありません。

これで勝負だ!

ぼくには一つのイメージがありました。それは、これまで客として出かけていた、各地の古書祭りでの光景です。とりわけ、所沢で年4回開かれる「彩の国の古書祭り」での子ども本の売り場での光景や、去年の秋出かけた京都の百万遍知恩寺の「古書祭り」の場面が、今回のぼくのイメージの基礎にありました。

所沢では開店前から多くの人が行列を作っています。体育館のような広い会場は古書店別に区切られています。子どもの本のコーナーだけは一個所にまとめられています。開店と同時にカゴ(会場においてある)を持ったお客は、そこに殺到したので、殺到したのは別に子どもの本のブース

だけではありません。それぞれのお目当ての古書店のブースに群がったのでした。でも、子どもの本の売り場は、女性の比率が高いようで、見ていると、目に付いた本を手当たり次第にカゴに入れていている人が何人かいます。さらによく見ると連携プレイで、複数のカゴに本を入れて、休憩所に運び込んでいます。ゆつくり本を手にとりて選ぶという雰囲気ではなく、なにやら殺気だっている様子にも見えます。彼女たちをみていると、こうしてカゴに入れた本を今度は、じつくり手にとりて選び、必要でないものはまた売り場に戻したのです。こういう方法もあるんだと感心したものでした。

百万遍はお寺の境内での古書市ですから、各古書展別にテントがあるので、子ども本だけは一つのテントに集められていました。ここでも開始時間と共に目当てのテントに客は殺到していました。

(次号へ続く)

お知らせ

今泉吉晴氏の「ピアンキの名作『くちばし』二つの版の謎をとく」を読んでいくと、今泉さんの筆を通してピアンキという作家の深さや素晴らしさがとてもよく理解できます。次回7回目からは別な作品も登場して、新たな展開が予想されます。ところで、この連載は次回(12月号)は一回お休みをいただき、1月号に7回を掲載いたします。お待ちください。